

令和8年9月4日

「デジタルな形態を含む教科書」の発行・採択等に係る指針に関する意見書

全国連合小学校長会

(1) 全てのデジタルの教科書については、児童生徒の発達段階や教科の特性等を踏まえ、学年・教科を限定して発行・使用を認めることについて

○学習効果とリスクのバランスを考えた段階的導入を考えたい

デジタル教科書は個別最適な学びや協働的な学び、学習指導において配慮を要する児童への支援に有効な主たる教材であると考ええる。一方で、使用に際して児童の視力低下や眼精疲労等の健康面での課題や学習内容の手書きによる理解、ICT環境格差への懸念も考えられる。そのため、一律の導入ではなく段階的・限定的に導入し、効果と課題を検証することが妥当であると考ええる。

○低学年児童の資質・能力育成の重視を考えたい

低学年児童にとって紙教材全体を俯瞰しながら学習する経験や鉛筆の書く作業（筆圧、はねはらい等の運筆）等必要な基礎的な学びの習得や、実物を操作するといった「身体感覚」を損なわないようにすることを考えたい。特に入学直後の1年生にとっては、学習環境の中でまず「書くこと」「読むこと」を大切にする必要がある。そのため、デジタル教科書よりも、児童全員が紙の教科書を手に取り、担任と一緒に声に出して読む習慣や環境を整えることが重要だと考える。

また、低学年児童は端末操作そのものの習得に個人差が大きく、そのことへの指導に相当な時間を要することが想定される。そのため、学習内容そのものを扱う時間に支障が無いように留意しなくてはならない。これらのことから低学年での導入は慎重にすべきである。

○児童の発達段階や教科の特性を考慮することについて

どの基準で学年や教科を限定し、発行・使用を認めるかを判断することは容易ではない。今後、「多様性の包摂」を重視する方針のもとでは、同じ学年であっても児童の実態はさまざまである。したがって、デジタル教科書を活用できる環境を整えたうえで、デジタルか紙媒体かを現場の教員が児童の実態に応じて選択できるようにすることや場合によっては児童自身が選択することも考えていきたい。

○デジタル教科書の特性を生かすことについて

デジタル教材は、動画、音声、拡大表示等ができる機能を有しており、児童の理解促進の効果が期待できる。例えば理科では、季節教材の時期が地域気象環境により実態と合わない場合や、天候の影響で植物の生育を観察しにくい場合がある。その際、デジタル教科書や動画等のコンテンツを活用することで、児童の理解を深めることができる。高学年では、端末を学習道具として使うことによって必要な情報や学習方法を自分で選ぶ力が育つことも考えられる。そのため、教科によっては、全てがデジタルの教科書を選択肢として認める余地があると考え

る。現状としては、外国語や図画工作科、音楽科などの実技を伴う教科が考えられる。

(2) 全てがデジタルの教科書が相応しくない学年段階や教材について

児童の発達段階や指導を考慮すると、小学校においては『紙とデジタルのハイブリッド形態』の教科書が望ましく、4年生以下はフルデジタルの教科書使用は避けたいと考える。

特に低学年や、文章の熟読・俯瞰・思考の深化が必要な教科（国語・社会・道徳）においては、紙の教科書が児童の学習には有効であると考ええる。また、国語など基礎的な読み書き能力を育成する教科においても紙の教科書の有効性が高いと考える。

また、デジタル教科書の使用は児童の視力や睡眠への影響など健康面への懸念もあり、紙を基本としつつ、学習効果を鑑みデジタルコンテンツを活用することを考えたい。例えば、英語の発音・理科の観察動画・社会科の資料映像・読み上げ機能・文字拡大・翻訳機能等、特に学習障害のある児童・外国につながる児童・不登校児童生徒 にとっては大きな学習支援になると捉える。

繰り返しになるが、小学校段階では紙を基本としながら、教科の特性や児童の実態に応じてデジタルの利点を活用したい。将来的には低・中・高学年と段階的に活用を拡大することが考えられるが、手書き学習の価値や健康面への配慮を重視し、紙とデジタルそれぞれの効果（強み）を生かせる多様な学習ニーズに対応できるハイブリッド型を基本として検討していくべきである。

(3) 紙とデジタルと組み合わせたハイブリッドな形態の教科書における、紙中心の構成が望ましい学年・教科とデジタル中心の構成が望ましい学年・教科について

前述のように、小学校段階では紙を基本（ベース）としながら、教科の特性や児童の実態に応じてデジタルの利点を効果的に融合させるハイブリッド型を前提としたい。そして、デジタルの比重は発達段階に応じて徐々に高めていく構成が望ましいと考える。

例えば、3年生以上の理科・社会科においては、実験器具の取り扱いや実験・観察の様子、各地域や産業の特色など、映像資料が効果的なものについては、デジタルを取り入れた構成が望ましい。また、高学年では、英語や家庭科等の技能系教科などで音声や動画、シミュレーションを活用することで、児童が学習内容をより具体的に理解し、学ぶ楽しさを感じられる場面が増えるものと考えられる。

さらに、外国語や図工・音楽・体育などの実技系教科では、正しい発音の確認や手本となる動きの動画視聴が学習効果を高めるため、高学年においてはデジタル中心の構成も取り入れたい。

ア 紙が中心の構成が望ましい学年や教科について

「低学年の国語、書写、算数」

これらの教科は、読むや書く、計算する、思考を整理するといった基礎基本の定着が重要であり、紙が望ましいと考える。

イ 紙とデジタルのハイブリッド形態について

「高学年の理科や算数、社会、音楽、家庭科、外国語等」

算数や理科、社会については、動画や3Dモデル、地図情報やデータベースとの連携などは、デジタル教材の学習効果が期待できる。外国語については、音声機能、発音、リスニングの充実が期待できる。家庭科や音楽については、実習動画や演奏方法等の確認ができ、子ども自ら確認できる。

ウ デジタル中心の学年・教科について

どの教科についても、児童が書く、思考する場面において、紙の良さを生かしたい单元がある。そのことから、教科としてデジタルのみになった時に、指導のしづらい場面があることは想定される。もし、どうしてもデジタル教科書のみとするならば外国語が望ましいと考える。

以上